



ア
メ
リ
カ
童
話
か
ら

18

松 原 至 大

サリー・アンの涙

サリー・アンは、目をさましたとたんに、今日は、楽しい日だと思いました。目を輝かして、あたりを見まわしました。心がわくわくして今にもなにか、うれしいことが始まるように思えました。

「ねえ、マリーサ、今日もうれしい日よ。」と呼びかけました。

「ほんとうでございますよ。」

と、マリーサは、サリーの着かえをひろげながら答えました。「夏だと申しますのに、今朝は春の日みたいですよ。お食事の前に、ちよつと外へ出てみましょうか——」

こう言うマリーサの顔も、にこにこしていました。

「わたし、顔を洗つたり、着かえたりする間、おとなしくしているわ。」

サリーは、ベットからぬけ出すと、すぐに約束をしました。

糊のついた青いドレスを着て、ピンクの頬のあたりには、金髪のカールを、ひよひよい動かせながら、ぴよんぴ

よんはねて、ホールへおりてから、外へ出たサリー・アンは、まるで花のようでありました。子猫のメリー・レッグスが、そのあとを追いかけて行きました。

外の空気には、育つて行くいろいろなもののよい香りが、いつばいでした。ふわふわとした、大きな白い雲が、青い空にゆつくりとただよつていました。そのうしろから、小さな子供の雲がついて行きました。

「雲も散歩に出かけるのねえ。それとも、買いのかしら。」

こう言つて、サリーは、お家の花が、どの位のびたのか見ようと思つて、走つて行きました。

こんなに楽しい日でしたから、もうしだれかがサリーに、三十分もたないうちに、あなたは、玄関のステップで大涙をこぼすようになりますよと言つたとしても、サリーはほんとうとは思わなかつたではありません。

けれども、それが、ほんとうのこととなつたのです。間もなくサリーは、きれいな花も、小さな子供の雲も見えなくなりました。メリー・レッグスが、慰めにきてくれても、足で追ひのけました。

「わたし、涙で、ハンケチを、びしょびしょにしちやつた。」

小さな青いハンケチを、エプロンのポケットにおしこみながら、サリーは、まだ泣いていました。

「今度は、エプロンをぬらしてしまふんだわ。それから、バケツもいつばいにするんだわ。」

こう言つて、前かがみになつて、エプロンの上に、涙をこぼしはじめました。その時、ふしぎなことがおこりました。サリーの涙は、ちつともエプロンに吸いこまれて行かないのです。ただそれはころころとこぼれて、ピーズのような小さな玉になりました。

サリーは泣くのをやめて、それを数えました。

「一つ——二つ——三つ——四つ——五つ。」泣き声で数えてから、やがて目を大きく見はりました。だつて涙

の玉の中になにかでいつか見たことのある、それはそれはかわいい生きものが立つていたのですもの。それは、サ
リーの小指よりも、小さいのです。そのドレスは、どこもきらきらしていて、霜のようでした。その目は青くて、
お家の花壇のへりのところにあるグレーブ・ピアシンス（ぶどうの房のように、るり色の花がついている小さなピ
アシンス）の、まるっこい小さな房を思い出させました。

この小さな生きものが、じつとサリーの目を見つめて、

「なぜお泣きになるの？」

と聞きました。

「わたし、わたし——」

と、サリーは言いかけてましたが、あまりびつくりしたので、

「忘れちゃったわ。」

と言つてしまいました。

「わたしは、涙集めの女王ですよ。わたしの助手たちが教えてくれました。あなたが、涙をむだづかいしていま
すつて。」

こう小さな生きものは言いました。

「涙をむだづかいしてるつて？」

サリーは目をまるくして、問いかえしました。

「そうですよ。助手たちが、あなたは、どんなつまらないことにもお泣きになるつて、言っていますよ。だから
助手たちが、いそがしくて困っていますよ。」

「まあ、それ、どういふこと？」

「助手たちは、どんな涙でも、『涙の御殿』に運んで行かなければならないのですよ。ごらんなさい。もう、あなたの涙を運びにきました。」

五人の小人が、茶色のドレスを着て、頭の上に長いとんがり帽をのせて、羽根のはえた小さな靴をはいて、いっしょうけんめいに涙をひきずっていました。小人たちが、しつかりと涙をかかえると、靴の上についた小さな羽根は、空気をあおぎはじめました。すると涙集めの小人たちは、しずかに地面を離れて行くのでした。

「サリーさん、『涙の御殿』へ行つて、あなたの涙が、どれだけあるか、ごらんになりませんか？」
涙集めの女王がこういふと、

「まあ、うれしい。どうぞ。」と、サリーは答えずにはおられませんでした。

女王が、杖を振りました。すると、サリーのからだだがだんだん小さくなつて、女王と同じくらいになりました。女王は、また杖を振つて、やさしい声で、歌をうたいました。

「ランバ、ダンバ、ドイツグリー、ロー、わたしたちを連れてお行き。」

ふたりは、だんだん高くのぼつて、空を走つて行きました。サリーの身体も、たんぼの綿毛のように、軽くなつていたのでした。

サリーは、地面を見おろしました。今までいた町が、クリスマスのお店で見たおもちやの町のように見えました。町を走るいろいろな車が、いそがしい蟻のように、行つたり来たりしていました。やがてふたりは、雲の中にはいりました。と思うと、にわかに目の前に、きれいな、輝くような御殿があらわれました。

女王はサリーを案内して、広い階段をのぼると、見たこともない大きなお部屋にきました。ビーズで作つたとほ

うもない長い鎖が、天井からも、また壁にもさがつていました。すきとおつて、きらきらしたのもありました。ばら色のも、青いのも、ねすみ色のもありました。

「これは、みんな涙ですよ。」

と、指さしながら、女王が言いました。

「あの小さな助手さんたちが、この涙を一つ一つ、運んだの？」サリーが聞きました。

「そうですよ。でもあの人たちは、運ぶのを少しもいやがりはしませんよ、なぜかといえばそれはみんな、楽しい時の涙ですから。」

「楽しい時でも、涙は出るの？」

「とても楽しい時には、涙の出ることもありますよ。」

と女王は答えました。

幾人かの小人たちが、サリーの近くで、いつしうけんめいに、一本の涙の鎖を作っていました。サリーはそれを見て、

「この涙は、お母さんの指輪のダイヤのように、光っているわ。」

と言いました。

女王は、その涙の一つに、手をふれて、

「どの涙の中にも、それが出るようになったわけが、絵になつてはいつています。中をのぞいてごらん下さい。」
と言うと、サリーを抱き上げて下さりました。

サリーは、涙についた一つの窓から、明るい小さなお部屋をのぞきました。テーブルの上に、小さなクリスマス・

トサリーが立つていて、それに、クリスマスのお菓子を入れたバスケットが掛けてありました。一人の女の子が、腕にしつかりと、金髪のお人形を抱いていました。そのお人形のピンクのドレスの上に、二つぶの大きな涙が、落ちていました。

「わたし、知つててよ。どうしてあの子が泣いているのか。サンタクロスのおじいさんが、あの子のことを忘れなかつたのが、うれしいんだわ。」
と、サリーが言いました。

「あなたは、お利口さんですよ。」

と、女王は笑いながら言いました。けれどサリーの手が、ねずみ色の涙の方へとどここうとすると、女王の手が、それをおさえました。

「ねずみ色の涙には、さわつてはいけません。それは、悲しみの涙なのですから。」

女王が、説明を下さいました。

「わたしの涙は、どこにあるの？」

サリーがたずねました。

「いらつしやい。お目におけましよう。」

こういわれて、サリーは、長いホールへおりて行く女王のあとに、ついて行きました。そこにも大勢の涙集めの小人がいて、みんな涙をかかえて、重そうに歩いていました。

「みんな、ずいぶん疲れているわ。」

サリーが言いました。

その小人たちについて、サリーと女王は、大きな部屋の中にはいりました。すると女王が

「これは、むだな涙、なんの役にも立たない涙です。あなたのは、ここにありますがよ。」といいました。

サリーはびつくりして、見まわしました。そこには、どこを見ても、きたない涙の繩ばかりでした。一つも、きれいなのはありません。

「どれも、どれも、きたないのばかり。」

とうとうサリーが、声をあげました。

「お役に立たない涙は、いつでもきたないのですよ。」

女王が、悲しそうに言いました。

サリーは、その一つをのぞいて見ました。一人の男の子が、足をけ立てたり、わめいたりして、床の上にごろんでいました。もう一つのは、小さな女の子が、お兄さんのスケートをほしがって泣いていました。

「この子供たちは、こんなに大きいのに、泣いたりして。そうやって泣くのは、赤ちゃんだけよ。」と、思わずサリーが言いました。

「このお部屋にある涙は、大きいくせに泣いた子のですよ。それはどれでも、楽しい一日をだいなしにしてしまいます。でも、あなたの涙も、ここにありますがよ。」

と、女王が言いました。

サリーは、その一つを、よく見ました。すると恥しさで、顔が赤くなりました。

「わたし、オートミールをおねだりしたわ。フレンチ・トーストがほしいついで、泣いたわ。お父さんが、わたしを食卓から、お連れ出しになつたわ。今朝わたしが泣きわめいたのは、そのためよ。」

サリーは、かくさずに言いました。

「なんにもならない涙ねえ。」と、女王がやさしく言いました。

「わたし、もう、そんなことで泣きません。」

サリーは、約束をしました。

「あなたは、たしかね。地球の人は、忘れっぽいけれど。」

女王は、また悲しそうに言いました。

「きつとよ、わたし、きつと泣きません。」

「まあ、うれしいこと。ほんとうにしつかりすれば、どんないけない習慣でも、なおすことができますよ。さあ、もう、お帰りの時間がきましたよ。」

女王は、手をたたいて、しずかに歌をうたいました。

「ランバ、ダンバ、ドイツダリー、ルーム、この子をお家へお連れしな。」

サリーは、ドアの外へ連れ出されました。ふわふわと地面へおりて、ぼんと音がしました——そこは、サリーのお家の裏口でありました。子猫のメリト・レッグスが、草の上を走つておむかえにきました。

サリーは、空を見上げました。もう女王も、御殿も、涙集めの小人も見えません。けれどもサリーは、雲の上に高く、女王たちがいることを、御殿のあることを知っていました。

「わたし、忘れないようにしようつと。」

サリーは、そつと心の中で約束しました。それからにつこり笑つて、オートミルを食べに、お家の中へはねて行きました。

(ゴールデイー・グラント・テイル女史の作による)